論文

近世覗きからくりは何を見せたか，その1

── カラクリを覗く ──

坂　井　美　香
SAKAI Mika

はじめに

これまで筆者は，近世覗きからくりに関して，その西欧社会からの渡来[1]と飴屋の持ちあるいた覗きからくり[2]について検討を行ってきた．覗きからくりとは，レンズが嵌められた覗き窓から箱の中を見る装置である．箱の中には強遠近法で描かれた絵によって「千畳敷」と表現される空間が広がり，その空間の中で八百屋お七，俊徳丸などの外題が演出される．現在は博物館などに残るのみとなっている．一方，博物館には覗きからくりに類似する装置として，レンズと鏡を用いて絵を見る覗き眼鏡，両眼でレンズを覗き込み立体画像を楽しむステレオスコープなどがある（図1）．それらはいずれも覗きからくりと混同されることが多く，どれも西欧社会から日本に持ち込まれたものである．

西欧社会から渡来したといっても，日本における覗きからくりの始まりはあまり定かではない．オランダ商館日記によれば，1638（寛永15）年から1664（寛文4）年の26年間に，「曲鏡之繪，曲遠眼鏡」，「暗室鏡（doncker camer glassen）」，「透視箱（perspectijff casken）」が持ち込まれているのを確認するだけである．「曲鏡之繪」はガラス絵であり，「曲遠眼鏡」はプリズム付きの遠眼鏡であり，「暗室鏡」はドンケル・カームル（カメラ・オブスクーラ）と呼ばれる風景を見たり描いたりするための装置であり，「透視箱」はパースペクティブなものを見る箱である．いずれも風景を見たり，見たままの風景を写すための装置であり，遠近感のある世界を覗き見るための装置である．しかし，どれが日本の覗きからくりのルーツだと言い切ることは出来ないし，資料上に現れないものが日本に持ち込まれた可能性も考えられる．

さて，近世覗きからくりは，その資料の初期において，飴売りの持っている資料として描かれている．英一蝶（1652〜1724年）の描いた三題の「糖うり（あめうり）」を手掛かりの始めとして，図絵資料を主に用い，加えて近松門左衛門1693（元禄6）年の浄瑠璃『ひら仮名太平記』，同じく近松の1711（正徳元）年の『冥土の飛脚』，1718（享保3）年『本朝文鑑』などを用い検討を行った．その結果，1700年を前後する時期には，飴売りが客寄せのために覗きからくりを持っていたことを知ることになった．すなわち，飴売りは飴桶と覗きからくりを天秤棒にかけ，客寄せのために覗きからくりを見せていた．箱は四角く，箱の天に障子を張って採光し，側面の覗き窓から箱の中を覗くようになっていた．

それ以降，覗きからくりは昭和の初期に至るまで見せ物としてあり続け，次第に大型化し，外題も変化をしていく．しかしながら，近世覗きからくりに関しては，その箱の中に，何がどのように仕掛

図 1-1　覗きからくり 「女一代嗜鏡俊徳丸」
三原市歴史民俗資料館蔵

図 1-2
反射式覗き眼鏡
神戸市立博物館蔵

図 1-3
ステレオスコープ
フジフイルムフォトミュージアム蔵
〔『展示品図録』2009年，3-06頁.〕

図 1　覗きからくりさまざま

けられていたのか，詳細なところはわからないままである．唯一，山本慶一が覗きからくりの発達史を考察しているが，覗きからくりは外来の文化ではないという立場に立ち論考を進めている．ただし，覗きからくりが日本由来であるという確たるものを示しているわけではない．覗きからくりというものの文化史を考える上では，まず先に覗きからくりが日本由来のものか，国外から長崎経由で持ち込まれたのかという点について検討しなければならない．その上で，外国文化の受容と吸収を検討するために，または日本文化の中で展開を捉えるために，その箱の中で何を見せたか，その見せたものがどのように変化をしたかを検討する作業が必要である．

本来ならば，以上の内容をまとまった１本として研究報告を為すべきではあるが，紙幅の都合上，本稿ではその１としてカラクリを覗くということについて考察をしていくことにする．

(1)　山本慶一の「のぞきからくり」発達史をめぐって

まず論考を始めるにあたり，近世覗きからくりの特徴を捉えるためにも，山本慶一の考えた発達史を大摑みし，その問題点を指摘しておこう．山本の考えは，その著書『のぞきからくり』[(3)]で知ることが出来る．以下，その主張である．

（ｉ）しかし上方や江戸で大評判をとった全盛期の竹田芝居の人気は大したもので，竹田からくりの名跡は後世までそれらの類似のものの代表名となった．この竹田からくりは歌舞伎より木戸銭が安かったが，庶民のだれでもが容易に見物できるというわけのものでもない．だからこの竹田からくりの人気に乗じて，街に竹田からくりを模倣小形化した「のぞきからくり」があらわれ，専ら児童たちの渇をいやすこととなった．〔山本　1973，p 14〕

（ii）そしてその後の海外の文化はわずかに長崎を門戸として，……それにともない蘭画とか紅毛画とかいわれる洋風画がわが国で描かれるようになった．この洋風画は当時興隆しつゝあった浮世絵版画に透視画法を導入し「浮絵」を生む．……．この浮絵創始は自から浮絵根元を名乗った奥村正信だといわれ，彼には元文五年（1740）の芝居舞台を描いた作品をはじめ多くの

作品が残されている．〔p 30〕

（iii）覗き眼鏡もその頃（筆者注：1646（正保3）年透視箱が長崎蘭館にもたらされた）相前後して到来したことにはまちがいあるまい．……．このオランダや中国からもたらされた眼鏡絵と覗き眼鏡は珍奇な高級玩具として一般へも浸透しはじめる．そうなると需要に供給が追いつかなくなり，我が国でもこの眼鏡絵がつくられはじめるようになる．丸山応挙は若い頃，京都の中島勘兵衛という玩具商に頼まれてこの眼鏡絵をつくった．〔p 34〕

（iv）「覗き眼鏡」と「のぞきからくり」はのぞく対称（ママ）物が眼鏡絵であるか，からくり仕掛の造物であるかが違うだけで構造も目的も大差はなかった．「のぞきからくり」は造物を箱の中にいれるかわりにこの眼鏡絵式の絵を中に仕込んだ．〔p 45〕

（v）このようにわが国ではのぞきからくりという媒体を通して思わぬ方向に走ったが，ヨーロッパ諸国では眼鏡絵は近代絵画へ，のぞき眼鏡は双眼立体鏡へと順調に発展していった．だから西洋には「のぞきからくり」などあろう筈がない．〔p 50〕

（vi）「のぞきからくり」ははじめの頃は竹田からくりの模倣にはじまり，ついで奇想天外の夜景，洋風の眼鏡絵の珍しさなどで，ながらく観客の興味をつないできた．しかし所詮は今の双眼立体鏡と同じでいつまでも名所めぐりや名場面集の連続では観客にあかれてしまう．そこで次に考えだされたのが，浄瑠璃で評判をとった作品やその時々のニュース，ゴシップ等々を内容に折りこむ工夫であった．現在の文芸ものゝのぞきからくりはこうして生まれた．〔p 53, p 54〕

山本は「のぞきからくり」が，竹田からくりを模倣小型化したことで始まったとする．それとは別に，紅毛画の技術が入り，1740（元文5）年には浮絵が制作されていたが，そのまた一方で，1646（正保3）年頃に覗き眼鏡がオランダからもたらされ，円山応挙が眼鏡絵をつくるようになっていた．結果，「のぞきからくり」は，箱の中の動く造物に替えて眼鏡絵を仕込み，それにより多くの情景場面を見せられるようになったが，観客に飽きられてしまうため，浄瑠璃作品やニュース，ゴシップを見せるようになり，今に残る文芸ものの覗きからくりとなったというものである．

覗きからくりが見せるものは，竹田からくりから，眼鏡絵で描かれた情景場面になり，浄瑠璃作品やニュース，ゴシップになり，ついには文芸ものになったとしている．この考えに関わる年代を確認すれば，後述するが，竹田のからくりが始まるのは1662年，円山応挙の眼鏡絵が描かれるのは1750年ごろである．

山本の描く覗きからくり発展史には幾つかの問題がある．まず第1に，何故竹田からくりを箱の中に仕込んだのかという点である．その理由を考えてみれば，覗かないと見ることができない見世物として，見せるものを箱の中に囲ってしまったことにあるだろう．しかし，日本の巷間芸能で箱の中に対象を囲ってしまう見せ物は覗きからくりのみである．人形廻し，豆蔵，傀儡師，紙細工の人形遣い[(4)]も，時代を下って立絵紙芝居も紙芝居も，人形や造りものを見せる見せ物であるが，箱の中に囲ってしまうことはしていない．この点から考えれば，覗きからくりは当初から箱の中にある何かを見せる見せ物であり，日本由来ではない可能性が高い．

第2に，竹田からくりをレンズで覗く意味があるのかどうかである．山本は『浮世床』（1811年）

の「おまへも見なされ眼鏡は紅毛の十里見」を引いて「オランダ渡りのレンズがはめこまれたものもあったようで」〔同 p 20〕とするが，飴売りの持つ覗きからくりで確認したように，当初からレンズが付いていた．からくりで動く人形をレンズを通して拡大して見るからには，何らかの効果が必要である．

第 3 に，日本に見たままの遠近的表現を求める風潮があったかどうかという問題がある．多分に，それはなかったと思われる．日本の伝統的絵画技法は鳥瞰図や絵巻描画の技術であり，そこにはピンホールカメラや，カメラ・オブスクーラ（ドンケル・カームル）が求めたような，見たままの再現を求める姿勢はないからである．確かに，浮絵は日本国外の遠近法描画技術を援用したものである[(5)]が，それは浮き出して見えるという不思議な感覚を楽しんだものと思われる．それは浮絵を見せる見世物があったことで確認できる[(6)]．

第 4 に，1646（正保 3）年頃に覗き眼鏡がもたらされ，眼鏡絵を覗きからくりが取り込んだとするが，それならばこの時点で西欧のものと日本のものは分化し，違うものとならなければならない。しかし，資料的にそういうことはなく，検討が必要である．ちなみに，覗き眼鏡（Zograscope：ゾグラスコープ）がヨーロッパで広告に出されるのは 1740 年から 50 年にかけてである[(7)]．

第 5 に，覗きからくりが名所絵を取り込んだ後しばらくして文芸ものを見せるようになったとし，文芸もののきざしが 1774（安永 3）年にあった〔同 p 54〕とするが，それ以前のものにも文芸ものの外題が見える．

これらの 5 点の問題点が生じる所以は，覗きからくりが日本由来のものであるとしたこと，西洋から覗き眼鏡が持ち込まれたことは認めながらもそれ以前のものを考えなかったこと，レンズの効果を考えなかったこと，竹田からくりをどう見せたのかを考えなかったこと，そして何よりも覗きからくりの発達を一本の線上にあることを前提としたからである．

それでは，以上 5 点の解決をも含めて順次考察を進めていく．

(2)　近世覗きからくり資料に見出すキーワード

近世覗きからくりの特徴を捉えるために覗きからくりに関連する資料を整理し，目立つキーワードとその年代を整理すると表 1 のようになる．表を概観して目につくことは，名所絵を見せるものが年代的には限定的であること，それに対して「竹田（大）からくり」は資料中に始めから終わりまであるということ，文芸ものの外題のうち「八百屋お七」が 1800 年を過ぎると目立つようになることだろう．

表 1 を年代順に見たままに単純に考えると，覗きからくりは，当初竹田大からくりを箱の中に仕込んで見せたものが，次第に名所絵を見せるようになり，からくり芝居などを次第に取り込んでいき，文芸ものを見せるようになったということになる．つまり，覗いて見せるものが変化したということになる．

更に注意してみれば，「浮絵」，「千畳敷」といった遠近法と関連する用語が 1730 年過ぎに見え，夜景を見せる装置が 1770 年前後から現れる．「オランダ」が付く語，「眼鏡」が付く「覗き眼鏡」，「オランダ眼鏡」，「眼鏡絵」はいずれも 1750 年過ぎである．それらは，その前後の時期に何らかの境界時期があることを予測させる．また，その時期を過ぎて，「写真鏡」，「円山応挙」，「司馬江漢」といった語がある．これらは，それぞれ写真文化の到来，西洋画法の渡来に関連するものである．

これらのキーワードを年代の側から見れば，1750〜1830 年頃に「浮絵」，「千畳敷」，「眼鏡絵」と

表1　資料中のキーワードと年代

	1675年		1725年		1775年		1825年	
	1700年		1750年		1800年		1850年	
名所絵				○　○◎	△　○◎	△	○	
「竹田からくり」 「大からくり」		○	○		△△○○	◎		△
「お染久松」			○					
「お千代半兵衛」				○				
「忠臣蔵」				△		○　○	○	
「八百屋お七」						◎	○◎	○
「浮絵」			△	○	○	○	○	
「千畳敷」			○				○	
「夜の景」「灯を灯す」				◎	◎○	◎◎　○	◎○	
「覗き眼鏡」			○◎		○　○		○	
「オランダ」		△			△ ○◎	○○		
「オランダ操」					△			
「オランダ眼鏡」				△			○	
「眼鏡絵」				△△		△		
「写真鏡」					○			△
「円山応挙」				△ △				
「司馬江漢」					○			

凡例：○は1回，◎は複数回，△は年代に幅のあるもの

いった遠近法画法に結びつくものが集中すること，また，「夜の景」，「灯を灯す」といった夜景を見る仕掛については1770〜1840年頃に集中することが確認できる．「オランダ」を冠する語3つについては「浮絵」の類とその期間は重なる．資料の中に，時代の特徴を示すキーワードが集中するということは，その始まりの時期が特定できるということであり，何らかのきっかけとなる事項があったということを示している．ただし，集中するからといってその時代にのみ期間限定的に存在したということではなく，その時代にも珍しい存在だったと解釈するべきだろう．

覗きからくりの発展史において，1750年から1770年にかけて連続性がなく，段差的な箇所があるということになる．それは，名所絵，浮絵，夜景，覗き眼鏡と眼鏡絵，西洋画法などに端的に表れる．山本慶一は，その段差的な箇所の所以を覗き眼鏡と眼鏡絵の到来に求めていたが，覗きからくりという箱とレンズと覗き窓を伴った装置を扱うのであるから，名所絵と夜景に着目して検討を進めるべきであろう．それでは，「竹田（大）からくり」といった連続性のあるキーワードと，名所絵，夜景といった不連続的なキーワードに着目して見ていくことにしたい．

さて，これから検討を始めるにあたっては，「竹田（大）からくり」が覗きからくり関連資料中に始めから終わりまであることから，先に1750〜1770年期に存在する段差的箇所について検討し，その後竹田からくりとの関連を考えることにする．

(3)　覗きからくり発達史の段差

「覗き眼鏡」,「眼鏡絵」

近世のぞきからくり資料中の「覗き眼鏡」「眼鏡絵」という記述は，およそ1750年から1830年にかけてにある.「覗き眼鏡」がどのような装置を指すのか呼称からは然りとはいえないが，眼鏡絵を見るための「覗き眼鏡」といえば，レンズを覗き，鏡で90度反射させた像を見る装置（図1，1-2反射式覗き眼鏡参照）をいう.

さて，杉浦丘園『和蘭及び外國關係圖書并物品目録』[8]に,「巴里其他風景畫　彩色入銅版　三箱」なる品が1751（宝暦元）年に出され，この付属品に覗き眼鏡一揃があることが記されている.

巴里其他風景畫彩色入銅版　三箱　額面仕立二十六枚　解説　一冊　タアリンナソツト等筆　中井厚澤　解説　西暦千七百五十一年（日本寶暦元年）　刊

覘眼鏡一揃　Spieger en Glaasen Kisten

附属品　器具三個に分解シ　一個ハ和蘭製古渡金襴袋入　他ノ二個ニ和蘭製古渡緞子蒲團ヲ添フ，其他和蘭製古渡麻布一枚及羽箒一本アリ

覘眼鏡道具入箱被ハ和蘭東印度商會マーク入和蘭製模様裂ヲ以テ製ス

パリ其の外の地の風景画が覗き眼鏡一揃と共にあり，道具はオランダ製の布袋に入り，箱にはオランダ東印度商会のマークがあるという．つまり，東印度商会が，覗き眼鏡と眼鏡絵を1751年に持ち込んだということになる．その名前は,「Spieger　en　Glaasen　Kisten」（鏡付き眼鏡箱）である.「Spieger」，鏡付きだったことがわかる．覗き眼鏡である．そして，パリやその他の風景画も一緒だとある．少なくとも1751年には覗き眼鏡が眼鏡絵と共に，オランダから日本に持ち込まれていたということになる．注目するべきは鏡付きであることに加え，形状が「Kisten」つまり「箱」であるということだ．この点については次項「夜景を見せる」で併せて再度考えることにする.

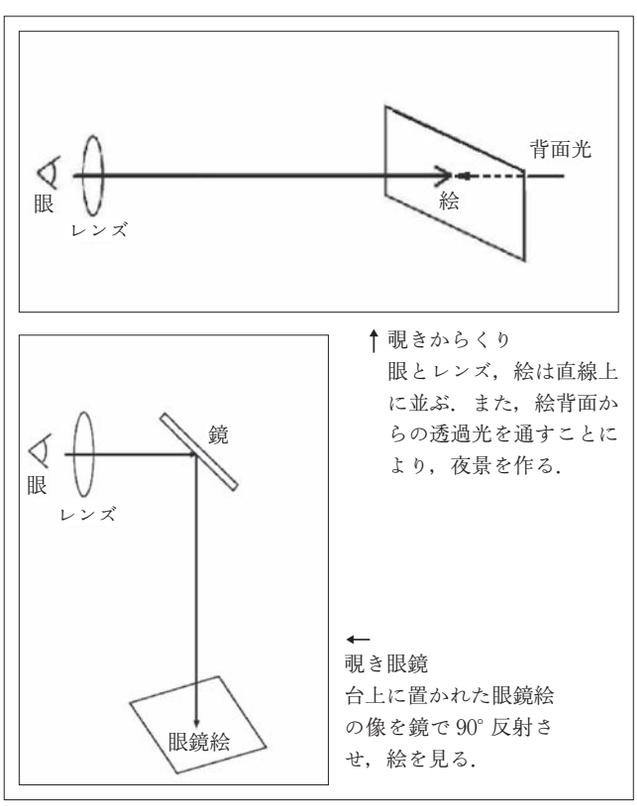


図2　覗きからくりと覗き眼鏡の原理

さて，その一方で，円山応挙は日本製の眼鏡絵を描いたことで知られている.『骨董協会雑誌』第四号[9]に，円山応挙（1733～1795年）が描いた眼鏡絵を久保田米僊が出品した際の紹介文が，以下のようにある.

『圓山應擧筆の眼鏡繪』出品者　久保田米僊君

此眼鏡繪四條河原の畫幅は大さ半紙大にして往事和蘭陀眼鏡（オランダめがね）と云ふものに装置して見たるもの實に圓山應擧の眞筆なり和蘭陀眼鏡と云へるは今も往々見る所の圖

畫又は寫真を地上(した)に置き「レンス」より窺(のぞ)き見れば前面にあるが如く見ゆるものにて一の理學的玩弄物なるが〈… 略 …〉其の由來を語らるゝこと左の如し〔同雑誌　p 39〕

つまり，応挙の眼鏡絵は半紙大で，「和蘭陀眼鏡」で見るもので，図画を下に置き，レンズを覗くとある．これは覗き眼鏡の構造である．

先の一文に続き，応挙の眼鏡絵「四条河原」の図絵出品に際して久保田米僊が語ったという内容が書かれている〔前同 p 39-40〕．それによれば，眼鏡絵は和蘭陀眼鏡という装置で見るものとしている．それに続く応挙と眼鏡絵に関わる部分を要約すると，応挙は11，2才の頃に京都四条新町の岩城という呉服店の小僧となったが，後に「四条柳馬場東へ入る中島勘兵衛」という玩具屋に仕え，人形の彩色などをしていた．その頃，和蘭陀より和蘭陀眼鏡という玩具物が中島方に舶来し，たいへんな好評となった．しかし，眼鏡に付属した絵には限りがあるため「目先變らざれば面白からず」と，中島が応挙に和蘭陀眼鏡用の絵を描かせたところ洋画の趣があり，後に写生の一派を開くほどになったというものである．つまり，1745年頃に呉服屋に奉公し，その後中島勘兵衛という玩具屋にて絵を習い始めたというのだが，その時期がわかれば，眼鏡絵がいつ頃から日本国内で書かれるようになったかわかるはずである．『萬書』によれば，応挙は17，8才で絵を描き始めたという[(10)]．それならば，応挙が眼鏡絵を描くようになったのは早くて1750（寛延3）年頃であり，佐々木丞平・佐々木正子によれば[(11)]1759（宝暦九）年頃のことになる．以上のことから，「覗き眼鏡」用の「眼鏡絵」が日本で作製されるようになったのは1750〜59年頃と推定できる．

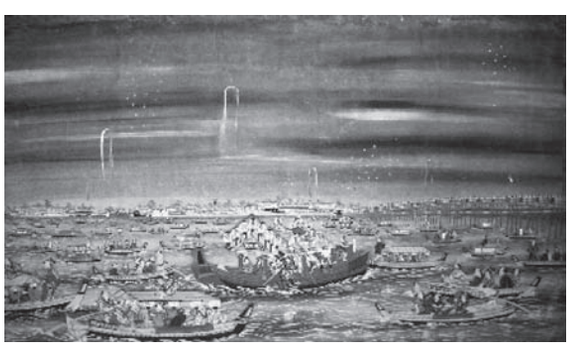
眼鏡絵は，1750年頃覗き眼鏡と共に日本に持ち込まれ，その後に，外来のものに真似た覗き眼鏡を作り，または，覗き眼鏡で見る絵を供給するために眼鏡絵が日本で作られるようになった．問題は，この眼鏡絵を覗きからくりが取り入れたのかどうかという点である．

(4)　夜景を見せる

覗きからくりの見世物としてのセールスポイントは，灯をともし「夜分(やぶん)の体(てい)」を再現することにあった．それは多くの資料に現れることでも知ることができる．

そして，夜景を見せる仕掛は影からくりともいうが，覗きからくりにのみ使われている技術である．絵を台上に置く覗き眼鏡では夜景を作ることはできないし，浮絵や浮世絵に夜景を見せる趣向はない．逆に見れば，だからこそ，灯を点じて夜景を見せることがセールスポイントにもなり，人々の関心を引くところでもあったのだろう．

昼景



夜景

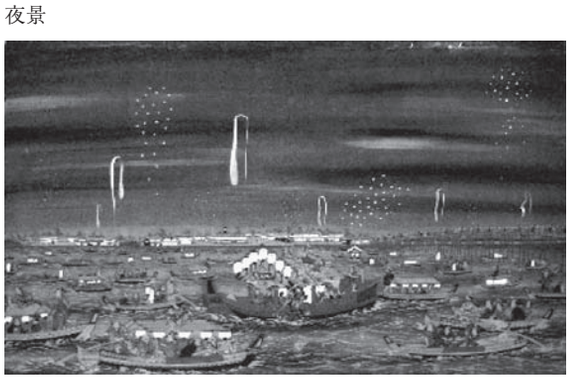
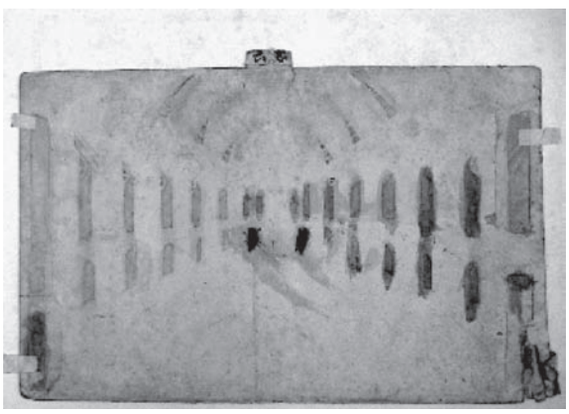
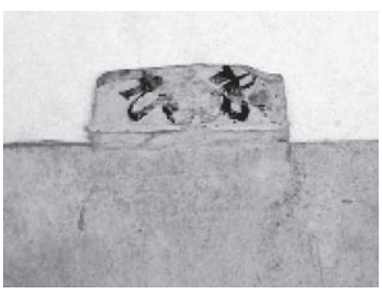


図3　影からくり浮絵「隅田川高尾つるし」
東京都江戸東京博物館蔵

（a）表

（b）裏面，窓の部分
窓部分が切り抜かれ，紅が塗られている





（c）裏面，つまみ部分「第六」の文字
小型の覗きからくりに組み込まれて使われていたことがわかる．

図 4　覗きからくり絵　柏崎市黒船館蔵

裏面
最上部に鏡を乗せる 45 度の台がある

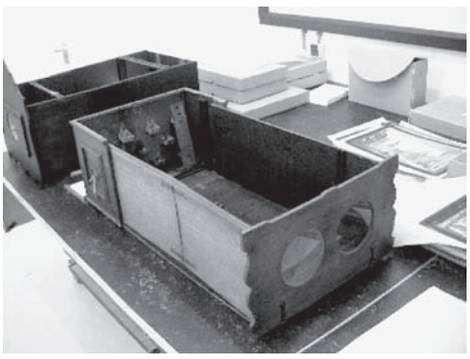
図 5　Perspective view peepshow box（年代不明）
The Bill Douglas Center University of EXETER 蔵（Item Number: 69027）

文字資料中では，「夜分（やぶん）の体（てい）」「灯（ひ）をともす」という表現で夜景を見せる仕掛を知ることができる．それは，1771（明和 8）年『両国栞』を最初としている．つまり，それ以前の資料中に現時点で見出すことは出来ない．そして，夜景を見せる仕掛は現存する覗きからくり装置にも継承されている．

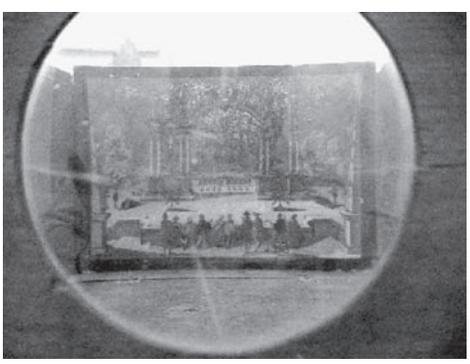
資料中に現れないからといって目的とする事項が無かったといえないことは承知することではあるが，『両国栞』以降，『東叡麓八景』の「覗関帰帆」，風落著山人『浮世くらべ』，平賀源内『實生源氏金王櫻』，山東京伝『新版手前勝手御存商売物』，山東京伝『這奇的見勢物語』，喜多村信節『きゝのまにまに』文化 4 年記事，『名陽旧覧図誌』，式亭三馬『一盃綺言』，鍬形蕙斎『今様職人尽歌合』，十返舎一九『金儲花盛場』，勝春海画　井久治茂内作『野曾喜伽羅久里義経山入』にその仕掛についての記述を見る．

夜景は，中ネタ絵の裏面を細工し，前面光を消し，背面光を利用することで再現される．資料によ

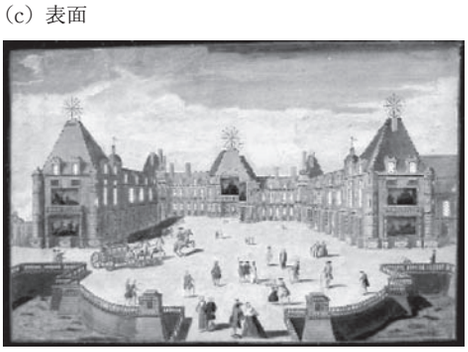
(a) 折りたたみ式覗き眼鏡
手前のものには２つのレンズがあるが，奥のものは１つである．
箱の一番奥には蠟燭立てと蠟燭掛けがあり，絵の背後から光を照らす仕掛になっている．



(b) レンズから覗く



(c) 表面



(d) 裏面
光を通す細工がしてある

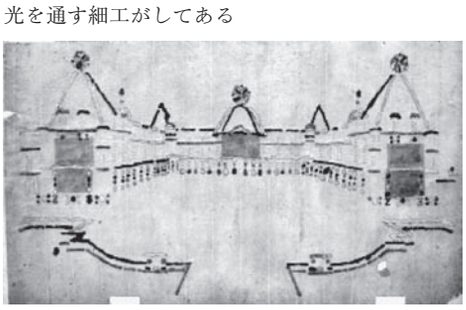


図６　OPTICAKAST Met 2 Kijkglazen en Kaarsenhouders（２つのレンズ付き覗き眼鏡）
アムステルダム Theater Instituut Nederland 蔵

く出てくる場面は花火の光景であるが，平賀源内『實生源氏金王櫻』(1779 年）には，「ソレ向ふに見へまするはあは雪の見世數多群集致しまする體．是も夜分の景色と御覧に入レますれば．ソレ邊りの茶店屋形船數多の小舟迄残らず火をてんじまする．何と御らふじませよい細工でござりませふがな．あなたには玉屋が花火ほん〳〵と燈しまする．此義お目にとまりますれば先ツせんの方はおかはりでござりまする．」[12]とある．図３にあるように，川面に浮かぶ屋形船と花火が瞬時に浮き上がったのだろう．

問題は，この光を利用した仕掛がどのように覗きからからくりにもたらされたかである．遠近法描画技術と共に日本に渡来し後に覗きからくりに取り込まれたのか，夜景を見ることができない覗き眼鏡に付く眼鏡絵として渡来したものを工夫したのか，それとも夜景を見る覗きからくりが持ち込まれ，それが見世物に用いられたのか，実物資料から考えてみたい．

まずは，図４，５，６，７を見てみよう．図４は日本において幕末期に用いられた覗きからくりの中ネタ絵である．光を通す部分がくりぬかれ，裏面から紅く彩色した紙が貼られている．このタイプのものを夜景として見るためには立たせて背面から光を当てなければならない．一方，図５は覗き眼鏡を箱の中に入れたもの（UK エクセター大学ビルダグラスセンター蔵）である．レンズ，鏡が箱の中に入っている．絵は底面に置くのではなく箱の内面に取り付けられた枠上に置くようになっている．多分にこのタイプが，前節で見た杉浦丘園『和蘭及び外國關係圖書并物品目録』の「覗巴里其他風景畫　彩色入銅版　三箱」(1751（宝暦元）年）であると思われる．しかし，背面からの光を用いて夜景を作り出すことはできない．

さて，図６のような鏡のない折りたたみ式の覗きからくりが，アムステルダム TIN（Theater Instituut Nederland）に残されている．これは，天部分はなく開放式であるが，絵を立てて前面のレンズから覗き，絵の背面から蠟燭で照らすというものである．暗い部屋の中で絵の背後から光を入れると，炎や窓が浮き上がる．保存されている絵の中にタイトルが書かれているものがある．

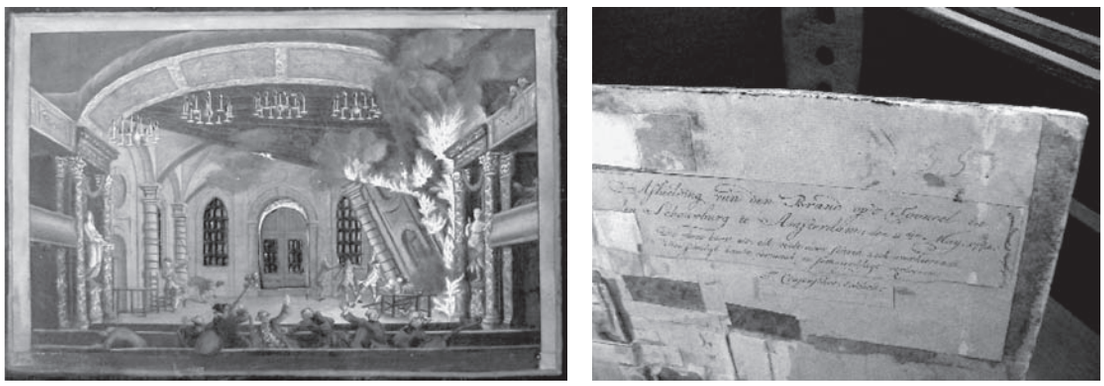


図 7 「1772 年 5 月 11 日アムステルダムの劇場の舞台で起きた火事」 アムステルダム　Theater Instituut Nederland 蔵
裏面にタイトルが書かれ，1772 年 5 月 11 日の火事を題材にしていることがわかる．

上　Theater Instituut Nederland 蔵
※手に持ち，光を通して撮影している．

下　柏崎市黒船館蔵

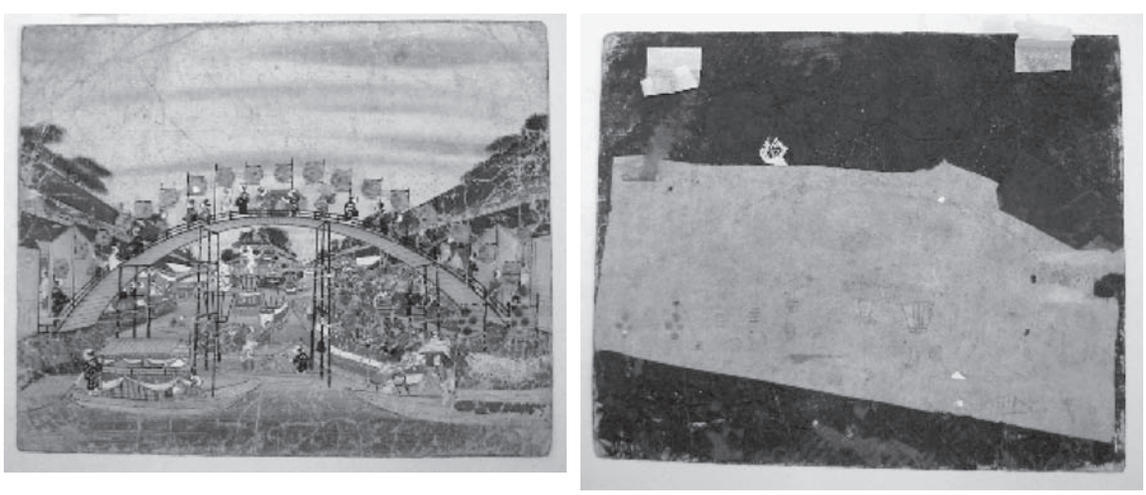


図 8　中ネタ絵裏面の差異，西欧と日本の覗きからくり

一連の組絵に，「1772 年 5 月 11 日アムステルダムの劇場の舞台で起きた火事」（図 7）というものがある．この題材の日付が 1772 年であるからには，その当時または近い時期に覗きからくりで見るため用に作製されたものと思われる．それならば，1700 年代の後半世紀にオランダからそれに類似する機器が日本に持ち込まれたといえるのではないか．

また，中に入れる絵の裏面を見れば，光を通す部分に青，赤，黄色の塗料が塗られている（図6(d)，図8右上）．切り抜かれて薄紙が貼られている部分にあるのだが，塗料が塗られることにより，それが光を通したときに暗闇の中でそれぞれの色で浮き上がるようになっている[13]．現在のネオンサインのような色合いを持っているわけである．

ここで，アムステルダムのものと日本のものとの夜景を見せる仕掛を比較してみると，同じようではあるが差異がある．切り抜きがあること，ピンホールが施されていることは共通であるが，日本のものは青，黄色の塗料が無く，窓や行燈や灯籠などの部分を切り抜き半分ほど紅く塗った薄紙を貼り，明るい部分とやや影になる部分を付けるだけである（図4（b），図8右下）．この違いを推測すれば，日本で似たものを作るにあたり，そのようなオランダからやって来たものと同じような塗料が手に入らなかった，日本で作成可能なものにすり替えたことによると考えられる．

夜景を見せる仕掛はどのように覗きからくりに持ち込まれたのか，それは，最初から覗きからくりの絵の仕掛として日本に持ち込まれ，その絵の透かし絵の技術を見よう見まねで応用し，外国の風景や日本の風景を作製し，見世物である覗きからくりに用いたということであろう．

(5) 覗きからくり発達史の段差

ここまでをまとめよう．日本には，1750年前後の時期に，レンズを通して鏡で90度に反射させた眼鏡絵像を覗く「覗き眼鏡」が持ち込まれ，それは珍しく人々の興味を引くものだった．その覗き眼鏡と共に眼鏡絵が持ち込まれたことは確かである．そして，当たり前のようではあるが，持ち込まれた後に外来のものに真似た覗き眼鏡や眼鏡絵を作製していた．一方，「浮絵」とは西洋の遠近法を取り入れたものであり，1740年頃には成立をしていた．オランダの画法と認識され，オランダをイメージさせる存在であった．

このように見ていくと，それらと覗きからくりは互いに相互の影響関係にあるようだが，果たしてそうであろうか．眼鏡絵は遠近法で描かれ，浮き絵も遠近法の一つを現す名称であり，覗きからくりの看板絵は遠近法で描かれ中ネタ絵も「千畳敷」と表現されるような遠近法で描かれていた．遠近感を与える絵ということで共通項ではある．しかし，眼鏡絵を覗きからくりが摂取したとも，浮き絵を覗きからくりが摂取したとも，いえないだろう．それは，絵を台上に置く覗き眼鏡では夜景を作ることはできないからであり，浮絵や浮世絵に夜景を見せる趣向はないからである．夜景を見せる仕掛は覗きからくりにのみ使われている技術であり，それが客を惹きつける一つの要因だった．どのようにこの技術が覗きからくりに持ち込まれたのかが，覗きからくり発展史を考える上での鍵となる．眼鏡絵や浮絵の技術を覗きからくりが取り込んだとすれば，日本でこの細工が考えられたとしなければならないだろう．

イギリスやオランダに残る1770年頃の覗きからくりの中ネタ絵と近世日本のものを比較した場合，裏面の仕掛の差は大きい．西欧のものは切り抜いた部分とピンホール部分を作り，薄紙と赤，青，黄の塗料を用いてイルミネーションを作り出しているのに対し，日本のものは明かりの部分を切り抜きピンホールを開けてあることは同じであるが，切り抜き部分に紅を薄紙に塗ることで陰影を作り出しているのみである．つまり，1771年以降の資料に見える覗きからくりの夜景を作り出す技術は，最初から覗きからくりの絵の仕掛として日本に持ち込まれた．それを見よう見まねで中ネタ絵の

作り方を応用し，見世物である覗きからくりに用いたと考えられる．

つまり，覗き眼鏡に付属する眼鏡絵を覗きからくりが取り込んだのではなく，夜景を見せる新たな覗きからくりが西欧から日本に持ち込まれたときに，遠近画法で描かれた風景画に細工がされて持ち込まれたと考えねばならない．

覗きからくりは，その発展過程において凡そ1770年を過ぎた時期，西欧からオランダ人経由で持ち込まれた覗きからくりによって，1つの段差的箇所を生じることになった．それにより，遠近感を以て遠くに見える景色を見せ，千畳敷の広さを感じさせる絵の描画法を取り込み，夜景を作り出す仕掛を日本的にアレンジしたものを持つことになった．そして，オランダ渡来の見せ物として人々に供するものになったのである．それは，それまでの日本の絵とは異なった世界を体感させる見世物として，はたまた灯を灯して夜景を見せるというセールスポイントと併せて，その後の覗きからくりの基礎形になったといえる．

(6) 覗きからくりの始まり

それでは，覗きからくりの始まりに立ち返り，先行研究で指摘されている竹田からくりとの関連について考えていきたい．覗きからくりにレンズが付いていただろう事は図絵資料（図10（a）（b）参照）の他に，黒川道祐の貞享版『日次記』の「〇又有山林高所假眼鏡使見四方之風景者…」（また山林高所を眼鏡を仮して四方の風景を見せしむる者有り），また『艶道通鑑』正徳5（1715）年「覗きからくりをびいどろなしに．大津繪を生でみるけしき．」で確認ができる．ただし，黒川道祐の貞享版『日次記』の方は神社祭礼の賑わいを書いた内の一部であるが，覗きからくりをさすのか，遠眼鏡をさすのかは判然としないところでもある．一方，『艶道通鑑』は，当時の覗きからくりがガラスを通して覗くものだったことを示している．少なくとも，1715年の覗きからくりにはレンズが付いていた．

もう一点，『艶道通鑑』からわかることは，レンズが付いていた事に加え，1715年時点の名称が「覗きからくり」であるということだ．その時点で，「からくり」を「覗く」装置であったことを示している．レンズを用いて，「からくり」を覗く装置である．

さて，オランダから持ち込まれたものが，ドンケル・カームルならば，風景を撮るないしは見る装置であっただろうし，透視箱というならば遠近感のある空間を作って見せたはずである．三角プリズムなら光路の中に置いたことだろう．そして，飴屋の持つ覗きからくりは，その風体からオランダを想起させるものだった．そうならば，当初の覗きからくりは，オランダをイメージさせる遠近感を感じさせる風景ないしは空間を見せる装置だったのではないかと考えられる．それならば，レンズが付いていてもおかしくはない．しかし，「からくり」を見せる装置はどう考えればいいのだろう．

やはり，竹田からくりが仕込まれていたのだろうか．関連する可能性を捨てることはできない．年代的にも整合性はある．しかし，図絵資料中の覗き箱には悉くレンズが嵌められていた．ということは，レンズを通して見ることが必要であり，何らかの効果があったからである．レンズを通して見る意義は，風景や空間を遠近的に手前を広く，離れたところを遥かに遠くに見せることにある．それならば，当初は遠近感を感じさせる風景画や空間を見せる装置であり，そこに竹田からくりのようなからくり仕掛で動くものを仕込んだと考えねばならないだろう．背景画があり，その前の空間に人形を

置くのならば納得ができる．それでなければ，竹田からくりの動きを絵に描いて見せていたのかも知れない．検討が必要である．

(7)　夜景を見せる以前の覗きからくりと竹田からくり

まずは，覗きからくりの呼称はどのように現れるかを見てみよう．1685（貞享2）年園果亭義栗画『字盡繪鏡』には「のぞき」とあり，1693（元禄6）年近松門左衛門『ひら仮名太平記』には「からくりのぞきの箱」,「からくりの箱」とある．また，1709（宝永6）年『遊君女郎花』には呼称の記述はなく，看板に「大坂下り　竹田　からくり」とある．そして，1711（正徳元）年近松門左衛門『冥土の飛脚』に至って初めて「覗きからくり」の呼称が登場する．以上のことから，当初覗く箱には名称がなく，何らかの「からくり」を「のぞく」ものをそれぞれに「ノゾキ」,「カラクリノゾキの箱」,「カラクリの箱」,「ノゾキカラクリ」と名を付けて呼んでいたと考えられる．その呼称からは，覗きからくりは「からくり」の入った箱を「のぞく」ことから始まっているということになろう．

ここで覗きからくりの「からくり」と竹田からくりの「からくり」は同一か，ということが問題になる．同一ではない場合，何が「からくり」かという問題が生じる．竹田からくりではない「からくり」仕掛があったことを想定する必要がある．覗きからくりの「からくり」と竹田からくりの関連を考えるにあたって，まずは，竹田からくりを概観することにする．

竹田からくり

竹田からくりは，ゼンマイやバネを利用したからくりで，大がかりに屋台や道具類を動かして見せた[14]．1762（宝暦12）年出版の『歌舞伎事始[15]』によれば，「からくり物真似子供狂言　竹田近江」は1658（万治元）年に口宣を頂戴し竹田出雲掾と名乗り，1662（寛文2）年にからくりを始めたという．1726（享保11年）年に名を改め竹田近江となった．その竹田近江は1729（享保14）年に病死，倅の三四郎に引き継ぎ近江清英を名乗った．その後は，1743（寛保3）年に弟平助が近江を名乗るようになったという．

その人気ぶりは，加藤曳尾庵が『我衣[16]』の1741（寛保元）年記事に大坂竹田近江が堺町勘三郎芝居の向で「からくり幷子供狂言」を見せたときの様子を書くが，それは「右貴賤老若群衆す．初日より三日の間だあまり人多き故，木戸を閉て不入.」というほどだった．また，1798（寛政10）年の秋島籬島『摂津名所図会[17]』巻四の「竹田近江が機捩戯場（からくりしばい）」（図9参照）でも知ることができる．「竹田近江が機捩戯場（からくりしばい）は，諸国までも聞こえて其名高し.」,「此芝居世に高く，東西邊鄙の旅人も，竹田唐繰（たけだからくり）を見ねば大坂へ來りし驗なしとぞ聞えし.[18]」とある．江戸大坂のみではなく，大坂に出て来たら竹田芝居を見ずには帰れないといわれたほどであったという．図9は，秋島籬島が描く，オランダ人が竹田からくりを見物する光景である．この図から，竹田からくりは，舞台の上で太鼓や大夫の語る節に合わせてからくり仕掛の作り物を見せたことがわかる．

その竹田からくりの作り物については，『機關千種の實生（からくりちくさのみばえ）[19]』で知ることができる．その版本は，葺屋町での興行にあたっての興行案内で出される演目と時間，その説明を書いたものである．その序に，

元祖竹田近江より御当地にて再三興行仕る所御贔屓を以て繁昌仕難有奉存候先祖竹田近江義ハ縫

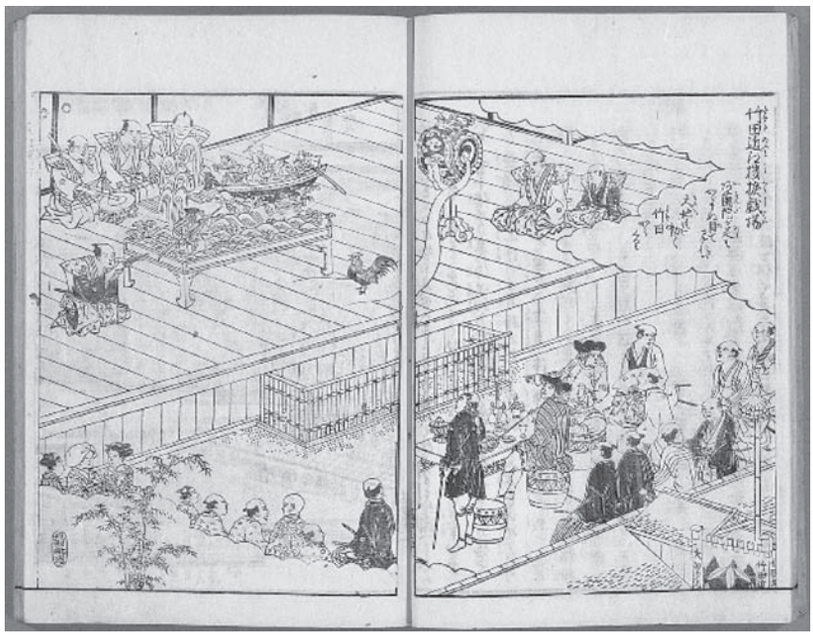


図 9　秋島籬島『摂津名所図絵』巻四〔国会図書館蔵〕寛政 10（1798）年

之介と申　御当地の産にて浅草観世音御霊管ニよつて砂土計と申儀工夫仕始メ則懐胎十月の図と申細工をからくりの根元となし百余年があいだ種々いたし来り候得こと〳〵く其品を顕しかたく有増外題を以て奉御覽ニ入候尤大祖父ゟ致し来りの細工不残私譲り請候得共若年の儀不調法の所ハ御了簡被成下候様偏ニ奉頼上候尤此度ふきや町辰松芝居においてからくり諸芸興行仕候あいだ先年ニ不相替御ひゐき厚く御見物御出のほと奉希候以上　　細工人竹田縫之介

とある．刊年不明だが，竹田縫之介[(20)]という名乗り，初代から百余年ということから，この興行は1780年前後のものであろう．竹田近江のからくりが砂時計から始まったこと，懐胎十月が評判を取ったこと，竹田縫之介が大祖父のからくりの品々を受けついだこと，今度葺屋町辰松芝居で興行をすることになったことなどが書かれている．興行に供された演目は，「おどり馬洗伊達染手綱」，「大からくり三筆松梅櫻」，「おどり恋慕流戀歌口」，「大からくり邯鄲栄花春」，「子供狂言生如来餅撞縁起」等々だった．

その魅力は，喜田川守貞が「竹田座，是モ近来カブキヲ専トスレドモ，カラクリ也．発起人ハ，操人形ノ細工人ニテ，〈… 略 …〉寛文二年道頓ボリニ，機関芝居ヲ興行シ，竹田近江掾ト再任シ，木偶自ラ種々ノ働キヲ為ス等，不可思議ノ巧ヲナセシコト，今ニ至リ，人口ニ云伝フ．[(21)]」とあるように，木偶が独りでに不思議な種々の動きをすることにあったのだろう．竹田からくりの魅力は人形の動きの不思議さにあった．

ところで，一世を風靡した竹田からくりではあったが，その後どうなったか．立川昭二は，以下のように説明する．

ところで竹田家は三代近江の没後，弟平助があとを継ぎ，竹田・竹本・出羽・中の芝居を掌中におさめた．しかし人心はようやく機巧から離れていく．機械的な技巧より本当の人間の芸を見た

いという欲求にかわり，歌舞伎に人気が集中し，からくり芝居の座運は急速に傾斜していく．四代近江となった清一の代には竹田芝居ももはや衰運は挽回すべくもなく，明和五年（一七六八）近江大掾の名を他家に譲り，竹田座を投出す．また二代出雲没後その子文吉は三代出雲を名乗ったが，これも人気はなく，安永二年（一七七二）竹本座は解体する．以後，竹田家は縫之助を名乗って，芸人としての竹田の名をようやく保つまでに落魄し，斜陽の一途をたどり，ついに興行界の第一線から竹田の名は消えていった．〔立川昭二　1969年[22]，p 177〕

1768年を過ぎてその人気は段々に衰え，1772年以降興行界の第一線から消えていったとある．そうではあるが，『我衣[23]』の1741年記事，秋島籬島『摂津名所図会』巻四（1798年）に竹田からくり芝居の人気の様子が窺え，更に下って『武江年表』1866（慶応2）年正月条に，「〇正月より浅草奥

表2　竹田からくりの看板を持つ覗きからくりとその関連記事

年	竹田からくりの看板を持つ覗きからくり資料	関連記事
1662年		竹田近江，からくり芝居を始める
1709年	『遊君女郎花』 看板には「大坂下り　竹田からくり」	
1715年		『艶道通鑑』「覗きからくりをびいどろなしに．大津繪を生でみるけしき」
1724年		初代竹田近江病死
1730年	『絵本御伽品鏡』 看板には「大からくり」	
1741年		『我衣』「（大坂竹田近江）人多き故，木戸を閉て不入.」
1751年		「和蘭及び外國關係圖書并物品目録」に「覗目鏡一揃」「巴里其他風景畫　東印度商會マーク入り」
1768年		近江大掾の名を他家に譲る
1772年		竹本座は解体する
1774年		『浮世くらべ』名所絵を見せる「のぞき」と人形を動かしてみせる「のぞき」の言立て
1772〜1781年	『東叡麓八景』 看板には「大からくり細工人竹田」 「オランダ操」	
1772〜1789年	（実物資料）「のぞきからくり　豊春・正美絵付」看板には「竹田大からくり」	
1782年	『新版手前勝手御存商売物』 看板には「おらんだ」「大からくり」	
1796年	『人心鏡写絵』 看板字は「からくり」	
1798年		『摂津名所図会』「竹田唐繰を見ねば大坂へ來りし驗なしとぞ聞えし.」
1801〜1803年	刷り物アルバム『華乃光』 看板には「竹田大からくり」	
1807年	『きゝのまにまに』「堀田大からくり」（からくりの言立て）	
1811年		『浮世床』「おらんだの出張」 「目鏡は紅毛十里見」
1846年	『絵本柳樽』 看板には「竹田からくり」	
1851〜1914年	『街の姿』 看板には「大からくり」	

山見せ物，秋山平十郎活人形，竹田縫之助ゼンマイからくり等なり[24]」とあるため，それなりに竹田からくりは続いていたものと思われる．前田勇によれば，竹田の芝居は明治初（1868）年に歌舞伎劇場に転じ，同9年に焼亡，弁天座となったとある[25]．

夜景を見せる以前の覗きからくり

表2に，覗きからくりと竹田からくりの関連を把握するための表を作成した．「竹田からくり」または「大からくり」の看板を持つ覗きからくり資料と竹田からくりの隆盛状況を対比して見るようになっている．

表2から，竹田近江がからくり芝居を始めてから覗きからくりは資料上に現れるが，竹田座が解体してもその名は残っていることがわかる．もっとも，竹田の芝居は明治時代まで続くのだから，覗き

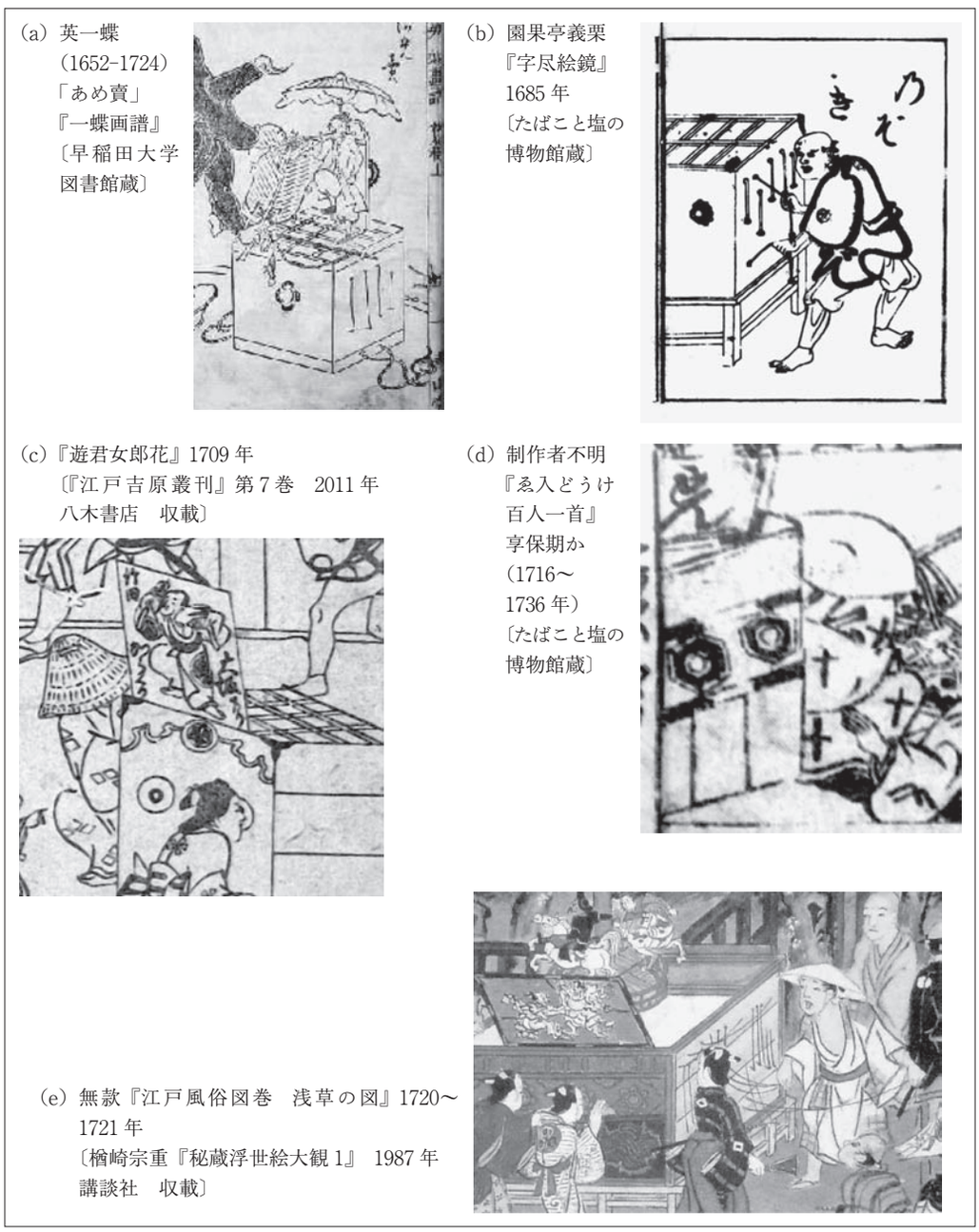
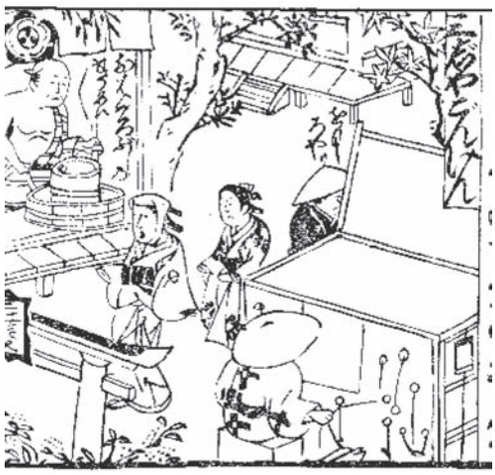


図10　その1　竹田からくりと覗きからくり，紐を引く男たち

(f) 近藤清春『江戸名所百人一首』1716〜1736年頃〔『どうけ百人一首三部作』1985年　太平書屋収載〕



(g)『絵本御伽品鏡』1730年〔『江戸風俗図絵』1993年　柏美術出版社　収載〕

図10　その2　竹田からくりと覗きからくり，紐を引く男たち

からくりが竹田からくりを見せていたとすることは可能である．

凡そ1770年を過ぎた時期に段差があったことを踏まえ，それ以前の覗きからくり図絵資料（図10その1，その2．※但し資料図絵の一部分のみ）を見てみよう．(a) 英一蝶（1652-1724年）「あめ賣」『一蝶画譜』，(b) 園果亭義栗『字尽絵鏡』（1685年），(c)『遊君女郎花』（1709年），(d)『ゑ入どうけ百人一首』（享保期（1716〜1736年）か），(e)『江戸風俗図巻　浅草の図』（1720〜21年），(f) 近藤清春『江戸名所百人一首』（1716〜1736年頃），(g)『絵本御伽品鏡』（1730年）である．以上の図絵資料のうち，(c)『遊君女郎花』，(f)『絵本御伽品鏡』には，「竹田からくり」「大からくり」の看板がある．

(a) 英一蝶「あめ賣」『一蝶画譜』，(b)『字尽絵鏡』，(e)『江戸風俗図巻　浅草の図』，(g)『絵本御伽品鏡』には，箱の横に立ち紐を引く男たちが描かれ，(f) 近藤清春『江戸名所百人一首』には，箱の後面で糸を操るからくり師が描かれている．(c)『遊君女郎花』，(d)『ゑ入どうけ百人一首』，のからくり師も箱の横に座り込み何やら操っている．そして，(e)『江戸風俗図巻　浅草の図』の覗きからくりの台上にはメリーゴーランド風のオランダ人騎馬人形が飾られている．これら7枚の図絵が示すことは，箱の横または後ろからから紐を操る仕掛が箱の中にあったことを示している．(e)『江戸風俗図巻　浅草の図』にいたっては，多くの紐が箱の横から出ていることから，それだけ多くの仕掛が動いたということであろう．こちらは単純な工作物ではなさそうである．

それで何を見せていたかということになるが，それぞれの看板絵から推し量るに，人形を動かして何らかの一連の話ないしは一場面を見せていると思われる．複雑さがどこまで進展していたのかは定かではない．たぶんに「竹田からくり」，「大からくり」に似せた何かを見せていたのだろう．

猿猴庵『名陽旧覧図誌』で知る覗きからくりの変化

覗き箱の中を覗くと何が見えるのか．猿猴庵が，オランダ風の夜景を見せ，千畳敷の空間を見せる覗きからくりの，その以前のものとそれ以降のものとを『名陽旧覧図誌』（図11，12）に書き留めて

古風覗眼鏡

宝暦の頃，春秋彼岸の賑合　或は神祭開帳などに見せし覗がらくりも　今のことき生写しの風景　オランダ絵の類ひにハあらず　箱の内に張子の山がた　あるは竹あじろの屋かたなどありて　小き人形一二立てあり　口上も何のていといふばかりにて弁舌面白くいふ事なし　三味せん太鼓にて時のはやりうたを唄ふ　其拍子にて糸を引ば　人形前へ出たり後へ引こんだりするばかりなりし　今時の子供はなか〳〵合点せぬ見ものなりしが，予が幼き頃何より面白き事の様に身待りし　其後大須山門へ今様の覗がらくり初て来り小屋かけの見せものにせしかば　貴賤目をおどろかし，夜のていの一時に火をとぼしなどするこそ實不思議もし摩法か飯綱かなんぞではないかとあきれて居るくらいなりしがそれより追々に其上〳〵が出来て興多き観とはなれり　扨江戸にては覗の口上なし今に流行うたをうたふ由古風を失はさるにやあすがおたちか　おなごりおしさは　かぎりなや　せへめて　とうげのちゃ屋まで　おすぎもおたまもおくりましょ　この想い

図 11 『名陽旧覧図誌』「古風覗眼鏡」〔東洋文庫蔵〕1806（文化 3）年～1820（文政 3）年

古風のぞきからくりの圖　今のめがね繪とは雲泥の違ひある事をしらしめんと其一二を爰に誌して後に傳ふ

梅がえ

むけんの年の　むめがへの　人形のはたらきの　からくりはなく　前へ出たり　あとへすさり　たるばかり

粟津が原

松原の　道具立　ありて　松の前と　うしろに　二つの人形　先へ出たりあとずさり　するのみ

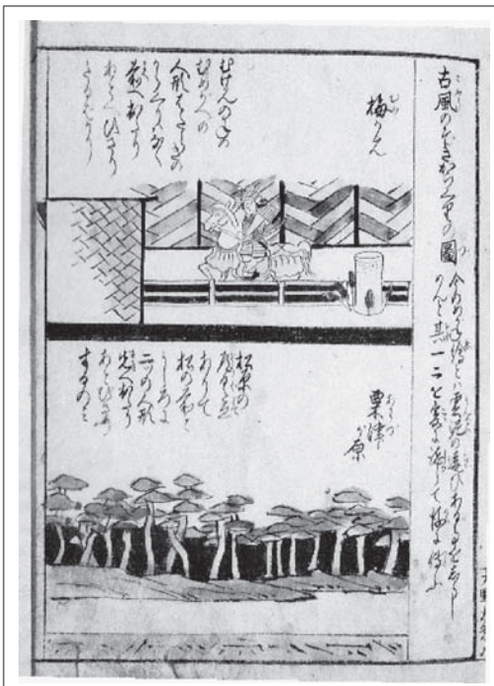


図 12 『名陽旧覧図誌』「古風のぞきからくりの圖」〔東洋文庫蔵〕

いる．

宝暦の頃，春秋彼岸の賑合　或は神祭開帳などに見せし覗がらくりも　今のことき生写(しようつう)しの風景　オランダ絵の類ひにハあらず　箱の内に張子(はりこ)の山がた　あるは竹あじろの屋かたなどありて小き人形一二(ひとつふたつ)立てあり　口上も何のていといふばかりにて弁舌面白くいふ事なし　三味せん太鼓にて時のはやりうたを唄ふ　其拍子にて糸を引ば　人形前へ出たり後へ引こんだりするばかりなりし　今時の子供はなか〳〵合点せぬ見ものなりしが，予が幼き頃何より面白き事の様に身侍りし　其後大須山門へ今様の覗がらくり初て来り小屋かけの見せものにせしかば　貴賤目をおどろかし，夜のていの一時に火をとぼしなどするこそ實(まこと)不思議もし摩法か飯綱かなんぞではないかとあきれて居るくらいなりしがそれより追々に其上〳〵が出来て興多き観(みもの)とはなれり　扨江戸にては覗の口上なし今に流行(はやり)うたをうたふ由古風を失はさるにや〔猿猴庵『名陽旧覧図誌』（1806（文化3）～1820（文政3）年），東洋文庫蔵〕

猿猴庵は，宝暦（1751～1764年）の頃に春秋彼岸の賑わいや神祭開帳等の際に見せていた覗きからくりは，今（文化文政期）と違ってそう面白いものではなかったとする．箱の内に張子(はりこ)の山形や竹網代の屋かたなどがあって，小さい人形が1つ2つ立ててあり，三味線太鼓で時の流行り唄を歌っていた．唄の拍子に併せて紐を引くと人形が前へ出たり後へ引いたりするばかりだったという．

そして，今の覗きからくりはオランダ絵の仲間で風景が生き写しになっている，夜分の体を見せるために一時に灯を灯したりするのは，魔法か飯綱遣いかと思うくらい不思議で，言い立ても面白く，段々にその上その上が出来，興味を引かれる見世物になったのだろうと述べている．

その上で「古風覗きからくりの圖」（図12）に，「梅がえ」，「粟津が原」の2つの出し物を描いている．

古風のぞきからくりの圖　今のめがね繪とは雲泥の違ひある事をしらしめんと其一二を爰に誌して後に傳ふ

梅がえ

むけんの年の　むめがへの　人形のはたらきの　からくりはなく　前へ出たり　あとへすさりたるばかり

粟津が原

松原の　道具立　ありて　松の前と　うしろに　二つの人形　先へ出たりあとずさり　するのみ

「梅がえ」は「人形のはたらき」がなく，馬に乗った武者人形が前へ後ろへ動くばかりだという．また，「粟津が原」は松原の場面があり，2体の人形が前後するのみだとする．つまり，猿猴庵が「古風のぞきからくり」と呼ぶ宝暦（1751～1764年）の頃のものは，三味線に併せて流行唄を歌い，小さい人形が背景の前を前後して見せるだけのものだったということであろう．そして，「今のめがね絵とは雲泥の違ひ」があったのだとする．

「今のめがね絵」が，オランダ絵の仲間で風景が生き写しであり，一時に灯を灯して夜分の体を見せ，魔法か飯綱遣いかと思うくらい不思議なものだとする記述は，前項（4）で見た凡そ1770年頃以

降の覗きからくりの特徴をよく表している．

『字尽絵鏡』,『遊君女郎花』,『江戸風俗図巻　浅草の図』,『絵本御伽品鏡』の図絵資料，および猿猴庵『名陽旧覧図誌』を併せて考えてみれば，1770 年過ぎの段差期以前，夜景を見せる以前の覗きからくり，すなわち猿猴庵いうところの「古風のぞきからくり」は，覗き箱側面，または後面の紐を引いて，人形を動かしてみせるものだった．それはつまり，背景があり，その前を小さな人形が前後に動く簡易なものだったといえよう．紐が多ければ多いほど，場面や人形の動きは複雑だったと思われる．竹田からくり芝居を簡易に箱の中に再現し，見せたものだったのだろう．

夜景を見せる以前の覗きからくりと竹田からくり

以上のように 1770 年過ぎの段差期以前，夜景を見せる以前の覗きからくりは，覗き箱側面，後面の紐を引いて，人形を動かしてみせるものだった．背景があり，その前を小さな人形が前後に動く簡易なものであり，竹田からくり芝居を短くまたは，単純化して箱の中に再現して見せたものだった．そうだとすれば，覗きからくりの始まりに立ち返り，若干の考察を加えてみたい．

覗き箱の内容と箱の中の構造と併せて考えてみよう．絵を繰り替える装置の場合は，箱の奥の方に絵が降りてくるため，覗き箱後方上部に 5 から 8 本の紐が平行に小間隔で並んでいる．それに対して，紐が箱側面や後面のアトランダムな位置に取り付けられていることは，箱の中の造作物，人形や舞台小道具，場面などを動かしていることを示している．

覗きからくりの始まりは，オランダ経由で国外から長崎に持ち込また．1715 年時点の名称が「覗きからくり」であり,「からくり」をレンズで「覗く」装置であった．

図絵資料に登場したのは，飴売りが天秤棒で担いで運ぶ「覗き込む箱」であり，窓が 1 つで天障子の付いた箱だった．それと同時期か，やや後れて登場した覗きからくりは，覗き窓が複数になりやや大型化し，地面上に置き，天障子を持ち，箱側面ないし後面の紐を操る仕掛になっており，箱をそのまま担いで運んでいた[26]．一方，飴売りの持つ覗きからくりは異国の存在を想起させるものであり[27]，1709 年『遊君女郎花』，1730 年『絵本御伽品鏡』のものには竹田からくりの看板が立てられていた．また，1750 年頃の猿猴庵いうところの「古風のぞきからくり」は，覗き箱側面，または後面の紐を引いて，人形を動かしてみせるもので，背景があり，その前を小さな人形が前後に動く簡易なものだった．

Richard Balzer“*Peepshows: a visual history*”[28]（1998 年）に 2 点の絵を見出すことが出来る（図 13 (a)，(b)）．1750 年と 1780 年のものである．どちらも箱側面からアトランダムに出た紐を引いている．その紐の位置は，上下左右にまちまちであり揃っているわけではない．図（b）「VOUTHFUL ENTERTAINMENT」には箱の上に人形が乗せられている．その看板旗には,「6 場面のロンドンの声．72 のユーモラスな版画を集めたもの…」とある．箱の内容が絵であるのか，人形であるのかはわからない．しかし，天障子が異なるだけで，図 2 の日本のものと酷似している．人形を乗せる覗きからくりは日本のものにもある．すなわち，同じような年代に同じような覗き箱が西欧と日本に存在していた．そうなれば，箱の側面・背面で糸を引く覗きからくりは，凡そ似たサイズで同じようなものが西欧から持ち込まれたということになる．さらに，そうなればである．西欧から来た覗きからくりは当初そのままに模作していたものを見せていたが，次第に同時代であり，流行をしていた竹田からくりを箱の中に取り込んだということになる．

(a) RARITETEN KASTEN. *c1750*, Heinrich Rode. 〔p 48〕

(b) VOUTHFUL ENTERTAINMENT *c1780*, Robert Dighton. 〔p 58〕

図（b）の覗きからくり後ろの看板旗には，「6場面のロンドンの声」という題，「72のユーモラスな版画を集めたもの…」（*The* Cries *of* LONDON *in Six parts. Being a Collection of Seventy two Humorous Prints, drawn from the lifeby that Celebrated Artist* Laroon. *with additions &. Tmprovem. by L.Boitardl.*）という宣伝文句が書かれている．

図13　1750年，1780年のpeepshow，2題
Richard Balzer *"Peepshows: a visual history" 1998* 年より（転載）

つまり，オランダから持ち込まれたものをそのままに模作していたときのものは，飴売りが持っていたオランダを想起させるものだった可能性がある．その名称はどうであったのかわからないが，「ノゾキ」とだけ呼ばれていたのかも知れない．日本の竹田からくりを箱の中に取り入れたときに初めて，その名称が「からくり」を「覗」いて見る「ノゾキカラクリ」となったということであろう．

日本の覗きからくりの始まりについて，覗き箱の内容と箱の中の構造とを併せ，なおかつ西欧資料と比較すれば，以下のことがいえるだろう．オランダ人経由で持ち込まれた珍奇な箱はレンズ付きで箱の中には風景や場面が転換する仕掛が入っていた．それを日本人が見よう見まねで似たものを作り，辻々や寺社境内で見せた．風景や場面を転換する仕掛は，竹田からくりの場面を箱の中に取り込むことを発想した．結果，日本のそれは，「ノゾキカラクリ」「カラクリノゾキ」と呼ばれるようになり，竹田からくりを看板にしたのである．

(8)　1770年前後の段差期以後の覗きからくりと竹田からくり

「人形のはたらき」とは

それでは，1770年前後段差期以後の覗きからくりはどうなったか．竹田からくりから名所絵や夜景を見せる装置にそっくり置き換わったのであろうか．

ここで，「人形の働き」という言葉に着目してみよう．猿猴庵『名陽旧覧図誌』に「人形のはたら

きの　からくりはなく」という文言があった．お決まりの「人形の働き」が無かったというのである．この「人形の働き」があるのが当たり前だったとすれば，このことばが，覗きからくりの箱の内容を読み解くヒントになるだろう．

文字資料を再度読み直せば，風落着山人左角斎『浮世くらべ』（1774（安永 3）年）にも「人形の働き」が出て来る．

> のぞき
> 三味せんに合セ人形のはたらき，おちよ半兵へが道行じゃ，哥ざいもんうきなの初夢，サアはじまりじゃててん〜〜，ツンツツンチャン〜イヤア，哥さいもん〽たどり行雨のさしかさ手もたゆく，おち柴の露にそでしほる，とある屋形にたとり着き，賤の女立出，それよりも能キにいたハり申つゝ，いざこなたへとをく座敷，こよひの雨の淋シさに，それ一ツきよくと染市が，ひく三味線のはやりうた，きミハ三味せん糸よりやつれておせゝ也．もはや御かまいやるなと，我ハ一ト間にてん小ぞう，半兵へおちよを尋いて行ハほとなく大山のふもとにこそハ着けれ．アラゝおそろしやまゝ母はたちまち鬼女とあらわれて，引さきすてんと飛かゝる．三味線と哥に合セ人形の目遣まで御めをとめられ御らうじませ．サア始りハまけじゃ〜．（注　下線部筆者による）〔風落着山人左角斎『浮世くらべ』（1774（安永 3）年），国会図書館蔵〕

出し物は，1772 年八百屋半兵衛と妻お千代が心中したことを題材にした「お千代半兵衛」[29]ものである．「三味せんに合セ人形のはたらき，おちよ半兵へが道行じゃ」と三味線に合わせてお千代と半兵衛の人形が登場する．

人形は，「半兵へおちよを尋いて行バほどなく大山のふもとにこそハ着けれ．」と，大山の麓の場面の中に現れ，「アラおそろしやまゝ母はたちまち鬼女とあらわれて」とは継母が鬼女となってしまう．背景となる場面が設定されていること，人形を動かし，早替わりをさせていたことがわかる．「三味線と哥に合セ人形の目遣まで御めをとめられ御らうじませ．」とは，人形の目使いまでを操って見せているということである．

「人形の働き」とは，背景の前で人形が芝居を演じることだということだろう．ゆえに猿猴庵は「古風のぞきからくり」を「人形のはたらきの　からくりはなく　前へ出たり　あとへすさり　たるばかり」と人形が前後するばかりで，何も演じないから面白みがないといったのである．

それに対し，1774 年頃の覗きからくりは「人形の働き」があり，場面が替わり，人形の早替わりがあり，人形の所作は目遣いまでが操られているものだった．人形からくり芝居にさらに近づくものだったのだろう．そして，1806〜1820 年頃のものは，オランダ絵の仲間で風景が生き写しであり，一時に灯を灯して夜分の体を見せ，魔法か飯綱遣いかと思うくらい不思議ものだった．猿猴庵のいうとおりに徐々にその上その上のものができ，面白いものになっていったのである．

ところで，猿猴庵の文章を読む限りにおいて，人形を見せる覗きからくりが夜景を見せる覗きからくりになったような印象を受けるが，そうではないと思われる．『浮世くらべ』には，ここに紹介をした人形を見せる覗きからくりの言い立てと，名所絵を見せる覗きからくりの言い立てとがある．それは，両者同じではないことを示すものであり，人形を見せる覗きからくりと名所絵を見せる覗きか

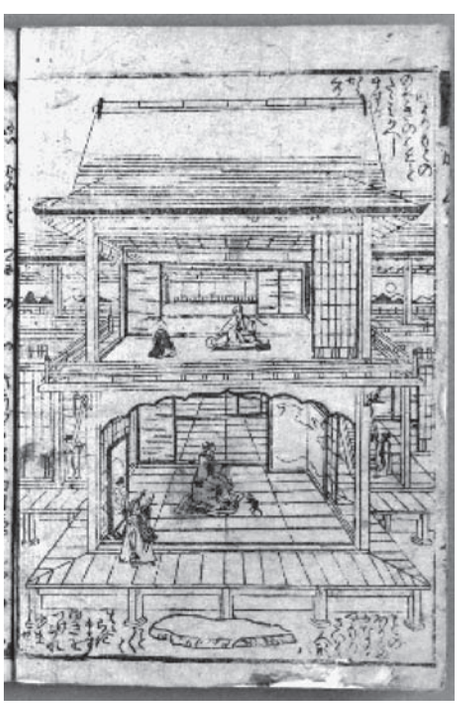
らくりが並行的に存在したことを示している．

「大からくり邯鄲栄花春」と『野曾喜伽羅久里義経山入』

さて，前述した『機關千種の實生』に紹介されている「大からくり邯鄲栄花春」（図14）は，覗きからくりと邯鄲話を組み合わせたからくりである．竹田のからくりと共に1780年前後期の覗きからくりの様相を知ることができる．

それは，箱の上の法師が鐘を打ち鳴らすと箱が開いて千畳敷の大広間が現れることで始まる．続いて，女郎や猫，長老などの人形が機関（からくり）仕掛で動くという．最後に主人が煙草をふかして本当の烟を出すと箱は閉まって元に戻るというものである．画を見れば，その仕掛の元となる覗きからくりの箱には2つの覗き窓が取り付けられ，子供が覗いている（三丁オ）．そして箱の中にはまさに千畳敷の空間が広がっている（三丁ウ）．奥へ行くほど狭く小さく描かれ遠近感をもたらすようになっている．その空間の中を人形が動くのである．襖や畳の線をうまく利用している．これをレンズを通して見たならば更に増強されることになり，平面的な絵画を見ては体験できない世界が作られたのであろう．

三丁ウ



三丁オ

〔三丁オ〕
大からくり邯鄲栄花春　此からくり五ツ半時ニ仕候
かざりおきましたるのぞきからくりはわずかのはこの内へ千ぜうしきをつもりましたるさいく
さいしょはほうしの人形　かねをうちまするとはこはことことひらけひろがりまして千ぜうじきのゑんとかはり　左右の子供は東西金銀の山こがねしろかねの日りん月りんとなりまする　さてはるかむかふくわとう江のきぬをまきあげますれば
女らうこたつの上にてねこをそばやかしまする　又さゆうのはしごをのぼりきうじ仕まする
此長らうがこと〳〵くはきそうぢをいたしまする
さてにかいのせうじひらけまして　あるじこどもをながめたばこのみまして　ほんのけむりをふかせまするさいく

〔三丁ウ〕
これより　もとののぞきのはこ
とたたみかへしまする　からくり　ことのほかこまかなるつもりさいく人形ハ　こと〳〵くはたらきます御きをつけられませ

図14 『機關千種の實生』竹田縫之介序〔早稲田大学図書館蔵〕出版年不明

さて千ぢゆうじきとかはりますれば　四てんわうのめんめんのこらず相つめまする　これもやぶんのていとかわりますれは　しょくだいにのこらずひがとほりまする　このきおめにとまりますれば　せんのかたはおかはりおかはり
「あれみなあかりがとぼつたよ」

部分拡大

図 15　勝春海画　井久治茂内作『野曾喜伽羅久里義経山入』〔東京都立中央図書館蔵〕1833（天保 4）年

つまり，1770 年代の人形が仕込まれた覗きからくりはこのようであったと思われる．

そして，この竹田大からくりに使われたような覗きからくりは，確かに存在していたと思われる．『野曾喜伽羅久里義経山入』の最後の頁に描かれる覗きからくり（図 15）がまさに邯鄲栄花春にあるもの（図 14）と同じであるからである．からくり台の上の法師が鐘を打ち鳴らし，箱の中を覗けば千畳敷が見えると詞書きにある．つまり，義経山入の話が実際に覗きからくりに掛かったものであるかどうかは定かではなく，覗きからくりを仮借した読み物である可能性もあるが，からくりの始まりに法師が鐘を打ち鳴らし，覗けば千畳敷の空間が見え，一連のものが終わり最後に灯が灯ると，「せんのかたはおかはりおかはり」となったのであろう．1780 年前後期の人形を覗かせる覗きからくりは，箱の中に浮絵の技法を用いて描いた背景があり，広々とした空間を作り出し，その中を人形が動いたということになる．

覗きからくりと竹田からくり

西欧から渡来した珍奇な箱が，覗きからくりと呼ばれるようになり，「竹田からくり」「大からくり」と名を看板に出したときには，紐を引いて動かす仕掛が箱の中に仕掛けられ，竹田からくりを擬したものだったと思われる．さて，問題は，1772 年竹本座が解体し竹田芝居が衰勢となってからどうなったかである．そしてまた，1770 年過ぎの段差時期を過ぎてからはどうなったかである．

ここまで見たように，覗きからくりは人形を見せる覗きからくりと名所絵を見せる覗きからくりに別れていく．一方，表 2「覗きからくりと竹田からくり」にあるように，「竹田からくり」「大からく

「機関帰帆」
機関一－覗値三－銭（からくりひとたびのぞいてあたひさんせん）／万里紅毛在目前（ばんりのおらんだもくぜんにあり）／相－見前人不知代（あいみてせんのかたかはることをしらず）／漫漫海－上掛帆船（まんまんたるかいじょうのほかけぶね）
火を点じ　まする日くれも　近ければ
のぞきも　やどへ帰る　尻に帆

「おらんだ操」
「大からくり」

看板は遠近法で描かれた西洋の景色，犬を連れた西洋人男女等.

図16 『東叡麓八景』無款 1772～1782年頃（安永中期頃）（上野山下と呼ばれた盛り場の風俗を描いた揃物）〔檜崎宗重編『秘蔵浮世絵大観別巻』1990年　講談社　収載〕

昼景

夜景

図17 「のぞきからくり　豊春・正美絵付」安永から天明頃（神戸博物館所蔵実物資料）

り」を看板に持つ覗きからくりは継続的に存在する．表2の1750年以降の資料を再度見てみよう．

『浮世くらべ』（1774年）は名所絵を見せる「のぞき」と人形を動かしてみせる「のぞき」の言い立てであった．『東叡麓八景』（1772～1781年）（図16）は，看板に「大からくり細工人竹田」「オランダ操」とあるものの，海上に浮かぶ帆船の景色を見せ，夜景を見せた．図17（実物資料写真）「のぞきからくり　豊春・正美絵付」（1772～1789年）は，看板には「竹田大からくり」とあるが，覗き箱の内容は風景画であり，夜景を作る．『新版手前勝手御存商売物』（1782年）（図18）の看板には，「おらんだ」「大からくり」とあるが，これも夕涼みの景色と夜景を見せるものである．刷り物アルバム『華乃光』（1801～03年）にあるものは，看板に「竹田大からくり」とあり，八百屋お七の人形が台の上に立っている．『きゝのまにまに』にある「堀田大からくり」[30]（1807年）の言い立ては，江戸霊岸島入船の景色や，津輕八方外ヶ濱の景色を見せ，夜景を見せるものだった．そして，『絵本柳樽』（1846年）（図19）の看板には「竹田からくり」とあるが，内容は不明である．『街の姿』（1851～1914年）

京四条川原ゆふすゝみのてひこれもやぶん
のけひとかはり、つらりつとひがとぼりま
す、しゆびようおわるますれば、おなごり
おしゆうはござりまするが、そうようさま
へのおいとまごひ、なんとよひさいくでご
ざりましよう
どん〳〵〳〵

図 18　山東京伝（北尾政寅）画『新版手前勝手御存知商売物』
1782（天明 2）年　〔九州大学蔵〕

図 19　英泉画『絵本柳樽』 1846（弘化 3）年〔『絵本柳樽』第 2 巻 1987 年　大平書店　収載〕

（A）覗きからくり

八百屋お七之段
お寺さんは駒込吉祥寺
茶の湯間座敷の次の間で
学問なされし後より
膝でよ一寸突て眼で
知らす　ヤレ私は本郷へ
行わいな　云々

此覗からくりは
お七吉三の事蹟
を始め三荘大夫
小栗判官の類　最
多し

（B）覗きからくり

図 20　清水晴風（1851（嘉永 4）～1913（大正 2）年）「覗きからくり」『街の姿』〔東京都立中央図書館蔵〕作成年不明

は，図20にあるように，看板に「大からくり」とあり，八百屋お七の一段が招き看板に書かれている．加えて，『街の姿』にはもう一枚「覗きからくり」の絵がある．裏面から糸を引き何やら操っている．そして，この箱は紐で担ぐようになっている．

以上のことから，次の2点がわかる．第1は，1750年以降の「竹田からくり」「大からくり」の看板を持つ覗きからくりは，刷り物アルバム『華乃光』，『絵本柳樽』，『街の姿』以外は，名所絵を見せるものであり，夜景を見せるものである．いうなれば，「竹田からくり」「大からくり」の看板は覗きからくりの看板であって，竹田からくりを示す看板ではなくなっているということである．夜景を見せる「からくり」が覗きからくりの「からくり」になったにも関わらず，「竹田からくり」「大からくり」の看板はそのまま残ったといえる．第2には，糸を背面ないしは後面から操って人形を動かす覗きからくりは，清水清風が『街の姿』（図19）を描く時代まであったということである．つまり，1750年を前後する時期に新たな覗きからくりをオランダ人が持ち込んで以来，覗きからくりは2系統に分かれた．1つは広々とした空間を作り出す浮絵の技法で描かれ夜景を見せる仕掛を持つ装置であり，もう1つはそれ以前からの背景の前を人形が動いて見せる覗きからくりである．後者には段変わりするものもあった．

(9) 近世覗きからくりの段差と，カラクリを覗き見る仕掛

それでは，まとめよう．本稿では，各種図絵資料及び，文字資料，及び博物館所蔵の現物資料を用い，近世覗きからくり発展史を捉えるための2つの検討作業を行った．第1は，近世覗きからくり資料一覧に見える1750〜1770年過ぎの1つの境界時期の検討であり，第2には近世史料全般に散見する竹田からくりと覗きからくりの関連についての検討である．

覗きからくりに関する資料から近世覗きからくりの特徴を示すであろうキーワードを選び，年代順に整理したところ1750年から1770年ごろにかけて登場してくるものがあった．そのキーワードの不連続は覗きからくり史における段差の存在を意味している．

先行する研究では，レンズと鏡を用いて眼鏡絵を見る覗き眼鏡が渡来し，その眼鏡絵を覗きからくりが取り入れたとされてきた．確かに1750年前後期にオランダ風景画を見る覗き眼鏡が持ち込まれ，それに付随して眼鏡絵も導入され，日本国内で作製されるようになっていた．そして，覗きからくりは同時期以降，オランダ渡りの珍しいオランダの風景画として取り込み，その夜景を見せる技術も取り込み，「オランダ」を看板や看板絵でアピールするようになっていた．しかしながら，オランダ渡来の覗き眼鏡の眼鏡絵を覗きからくりが取り込み，箱の中に入れたと直ちに結びつけることは出来ない．それは，覗きからくりの中ネタ絵が，灯を点じ夜景を見せる仕掛絵であるからである．

つまり，眼鏡絵を覗きからくりが取り込んだと仮定すれば，夜景を作り出す技術は日本で考案されたと考えなければならない．西欧諸国に残る覗きからくりの中ネタ絵が夜景を見せない，または日本からある程度遅れて夜景を見せれば，それを主張できるだろう．しかし，イギリスやオランダに残る1770年代頃の覗きからくり用の絵と日本のものを比較した結果，西欧のものに中ネタ絵の仕掛技術は存在し，その落差は大きいものだった．西欧のものは切り抜いた部分とピンホール部分を作り，薄紙と赤，青，黄の塗料を用いてイルミネーションを作り出しているのに対し，日本のものは明かりとなる部分を切り抜くこと，ピンホールを開けてあることは同じであるが，塗料を用いることなく，切

り抜き部分に貼る薄紙に紅を塗ることだけで陰影を作り出しているのみであった．すなわち，覗きからくりの夜景を作り出す技術は，最初から覗きからくりの絵の仕掛として日本に持ち込まれたのであり，それを見よう見まねで中ネタ絵の作り方を透かし絵技術に応用し，見世物である覗きからくりに用いたものと考えられる．

覗きからくりは，その発展過程において，1770 年前後期に西欧からオランダ人によって持ち込まれた夜景を見せる覗きからくりにより一つの段差的箇所を生じることになった．その結果，遠近感を以て遠くに見える景色を見せ，千畳敷の広さを感じさせる絵の描画法を取り込み，夜景を作り出す仕掛を日本的にアレンジしたものを持つことになった．そして，オランダ渡来の見せ物として人々に供するものになったのである．それは，それまでの日本の絵とは異なった世界を体感させる見世物として，はたまた灯を灯して夜景を見せるというセールスポイントと併せて，その後の覗きからくりの基礎形となったといえるだろう．

次いで，覗きからくり史における段差的箇所の存在を受けて，覗きからくりが見せたものについての検討の初めとして竹田からくりとの関連を検討を行った．覗きからくりの初期の段階は何を見せていたのか，箱で囲う理由，レンズを通して見る効果，覗きからくりの「からくり」がどこから由来したか，等を考えることが肝要だからである．

覗きからくりの 1600 年代末から 1700 年代前半の呼称は，「ノゾキ」とするものが多い．「カラクリノゾキの箱」，「カラクリの箱」というものもあり．「ノゾキカラクリ」の呼称が確認できるのは 1711 年である．すなわち，覗きからくりの呼称は「からくり」を「のぞく」ことから始まっているということになる．

一方，飴屋の持つ覗きからくりは，その風体からオランダを想起させるものだった．日本に箱で囲う見世物が他に見あたらないこと，レンズが取り付けられていたことから，日本に到来した覗きからくりは，オランダをイメージさせる遠近感を感じさせる風景ないしは空間を見せる装置だと考えねばならない．それでは，「からくり」をどう考えるかである．それは，もともと西欧渡来のものには風景や場面を転換する仕掛があり，そこに竹田からくり芝居の興隆に伴って竹田からくりが仕込まれたと考えざるを得ないだろう．取り込んだ時点で「カラクリノゾキ」「ノゾキカラクリ」呼称が生じたのではないか．年代的にも整合性はある．すなわち，当初は遠近感を感じさせる風景画や空間を見せる装置であり，そこに竹田からくりを真似たからくり仕掛で動くものを仕込んだのだろう．背景画がありその前の空間に人形を置くのならば納得ができる．

1770 年前後の段差期以前，すなわち夜景を見せる以前の覗きからくりは，覗き箱側面ないしは後面の紐を引いて，人形を動かしてみせるものだった．背景があり，その前を小さな人形が前後に動く簡易なものだった．紐が多ければ多いほど，場面や人形の動きは複雑だったと思われる．竹田からくり芝居を簡易に箱の中に再現し，見せたものだったといえよう．

その後，猿猴庵が『名陽旧覧図誌』（1806〜1819 年）において「追々に其上〳〵が出来て興多き観（みもの）とはなれり」というように，覗きからくりは徐々に変化をしていった．そして，「竹田からくり」の看板はその内容の変化に関わらずそのまま覗きからくりの看板となった．

そして，1770 年を過ぎる頃に新たな覗きからくりがオランダ人経由で入ってきた．それ以降，日本の覗きからくりは 2 系統に分化することになった．一方は「竹田からくり」「大からくり」の看板

を持つ覗きからくりでありながら，千畳敷の空間を作り出す浮絵の技法で描かれ，昼景と夜景を見せる「からくり」を持つものであり，他方は，糸を背面ないしは後面から操って人形を動かす覗きからくりである．

本稿での報告はここまでである．覗きからくりは２種のものに分化したが，それ以降更に日本文化の中に入り込んでいく．その過程と様相については，次稿「その２」で検討することにしたい．

注

（１） 坂井美香　2010 年 a 「覗きからくりと peepshow の接点 ── 西欧覗きからくり」『年報非文字資料研究』(6).

（２） 坂井美香　2010 年 b 「飴売りと覗きからくり」『歴史民俗資料学研究』(15).

（３） 山本慶一　1973 年 『のぞきからくり』 私家版.

（４） 人形廻し，豆蔵，傀儡師は，長谷川光信『絵本御伽品鏡』（享保 15 年）を参照．紙細工の人形遣いは，長谷川光信『絵本家賀御伽』（寛延５年）を参照．両絵本は，『江戸風俗図絵』柏美術出版　1993 年　に所収.

（５） 岸文和「序章　元文四年（1739）のヘッドライン・ニュース」『江戸の遠近法』勁草書房　1994 年，p 7～10.

（６） 平賀源内『根南志具佐』前編 （1763（宝暦 13）年）に，「浮繪を見るものは，壺中の仙を思ひ，」とある.

（７） Barebara Maria and Frances Terpak, *Devices of Wonder,* (2001). Los Angeles, Getty Publications. p 96.

（８） 杉浦丘園『和蘭及び外國關係圖書并物品目録』杉浦雅楽堂　1921 年，p 37.

（９）『骨董協会雑誌』第四号　日本骨董協会　1899 年.

（10） 佐々木丞平　1981 年 「應挙関係資料『萬誌』抜粋」『美術史』111 号　美術史学会，p 47.

（11） 佐々木丞平　佐々木正子「円山應舉年譜」『円山應舉研究　研究篇』1996 年，p 499.

（12） 平賀源内『實生源氏金王櫻』，入江整三編『平賀源内全集』下　平賀源内先生顯彰会　1934 年， p 1347～1348.

（13） 塗料を用いて夜景を浮かび上がらせるように細工した覗きからくりは，エクセター大学ビル・ダグラスセンターにも保存されている．その技術がいかなるものか，知りたいところではあるが，詳細に解説した研究書に未だ巡り会ってはいない．唯一，中崎昌雄解説・訳　L．J．M. ダゲール『完訳　ダゲレオタイプ教本』 朝日ソノラマ　1998 年　の「ジオラマ画板に応用された画法と証明」が参考になるだろう.

（14） 前田勇「竹田機関」『上方演芸辞典』東京堂出版　1966 年，p 379 参照.

（15）『歌舞伎事始』1762（宝暦 12）年　鱗形屋八文字屋合版．金港堂編集部『歌舞伎叢書』金港堂書籍　1910 年　に所収.

（16） 加藤曳尾庵『我衣』，鈴木棠三校訂「我衣」『日本庶民生活史料集成』第十五巻　三一書房　1971 年，p 9，p 10.

（17） 秋島籬島『摂津名所図会』巻四 〔国会図書館蔵〕 1798（寛政 10）年.

（18） 原田幹校訂　秋島籬島『摂津名所図会』上巻　大日本名所圖絵刊行会　1919 年，p 523 参照.

（19）『機關千種の實生』竹田縫之介序 〔早稲田大学蔵本〕 出版年不明.

（20） 四代目竹田近江の跡を継いだ五代目が縫之助を名乗った．竹田縫之助は明治の八代目まで続いたが，寛政（1789～1801 年）期の縫之助が機関細工の名人として有名である．前田勇「竹田縫之助」『上方演芸辞典』東京堂出版　1966 年，p 379 参照.

（21）『守貞謾稿』巻二十四「雑劇」．朝倉治彦　柏川修一『守貞謾稿』第四巻　東京堂出版　1992 年，p 15.

(22)　立川昭二「からくり師列伝」『からくり』法政大学出版局　1969 年.

(23)　加藤曳尾庵『我衣』，鈴木棠三校訂「我衣」『日本庶民生活史料集成』第十五巻　三一書房　1971 年，p 9，p 10.

(24)　金子光晴校訂　斎藤月岑『増訂武江年表 2』平凡社　1968 年，p 203.

(25)　前田勇「竹田機関（たけだからくり）」『上方演芸辞典』東京堂出版　1966 年，p 379.

(26)　図 19「覗きからくり」『街の姿』の（B）図を参照．からくり師の足下に担ぐための紐と棒が見える．

(27)　坂井美香　2010 年 b 「飴売りと覗きからくり」『歴史民俗資料学研究』(15)，p 16.

(28)　Richard Balzer, *Peepshows: a visual history*（1998), Harry N. Abrams, Incoporated, New York.

(29)「お千代半兵衛」，1722（享保 7）年大坂寺町で，八百屋半兵衛と妻お千代との夫婦心中があった．際物を上演することが盛んだった上方ではこれを直ちに脚色し，豊竹座で「心中二腹帯」，竹本座で「心中宵庚申」が上演された．〔「お千代半兵衛もの」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編著『演劇百科事典』平凡社 1960 年，p 449 参照.〕

(30)　喜多村信節『きゝのまに〳〵』〔国会図書館蔵〕（刊年不明）文化四年記事

〇堀田大からくり，夫會處被建，御覽に入まするは，江戸霊岸嶋入船の氣色，昆布數の子鮭塩引値段を引替〳〵，金と錢とを積て，其細やかなる處迄，御氣が付れますれば，津輕八方外ヶ濱の景色，遥向之方には唐船が見え，むかふは松前ゑぞが島，西ハカラフト，東はエトロウ，挑灯松明星の如く夜分之躰，こなたの面々，ほう〳〵迯まして，是が御耳にとまりますれば，オロシヤは左右へ引分れまして，箱館のけしきかはり，手付の侍追々はせ加り，大筒小筒先を揃へて，わづかの所へ數十萬兩の物入，段々寒さにむかひますれば，オロシヤは跡へくり戻します，ナント御老中肝が潰れましやう，せんの方々はしくじり〳〵，